

全国武徳祭での立ち振る舞い 「高みを目指す」

石川県支部 長田 順一

春光天地に満ち青葉風薫る候。本年四月二十九日「東伏見慈治総裁追悼・第五十二回全国武徳祭」が開催されました。今回の武徳祭は、本部の理事会が計画された新しい武徳祭運営の試金石となる大会でした。武道執行専門委員の中より各種役割を分担して進行する方法です。

特に高田寛次先生を委員長に管理運営委員が組織されました。武徳祭での質的規範・礼節規範の取り組みです。武徳祭に参加された方々に武道家の誇りと尊厳を今一度学ぶ機会にしたいとの意思です。早朝よりの会場準備を終えた旧武徳殿に管理委員会のメンバーが集まりました。高田委員長から武道家として大会での開会式から閉会式までの立ち振る舞いをもう一度徹底したいとお言葉です。旧武徳殿への出入り口での礼儀作法・演武態度・不慮の事故への対応など細部に及んでいます。

「そう難しく考えずに武道を学ぶ者が行う行動かを指針にして、参加の皆さん方に思い出に残る大会にして欲しい。管理運営委員に与えられた権限は演武を止めることもできますが、暴力的に声高々に指導することなく、武徳会会員を武道家として高みに導くと言う態度、言葉使いに心して頂きたい。演武を止めるときは、毅然として、「止め」を発する。後の始末は私が処理する」とのお言葉でした。

検証委員としての作法もあります。体調不良や緊張で日頃の演武が出来ない方。試斬りで刀を曲げてしまった事例もあります。演武者が見苦しい所作を自身で理解できない精神状態の時は、検証委員としてどういう態度を取るか大変難しい判断を瞬時に行う必要があります。

今回の大会では、演武時間を計り、時間超過者には黄色旗を掲げて注意喚起も行いました。本来なら必要のないことです。演武者自身が時間管理を徹底して頂ければと思います。時間をオーバーされた演武者の意識として、遠方より参加して七分の時間しかないのか、自己流派の素晴らしさを伝えたいなど色々な理由があります。しかし我慢が必要で。

今回参加者は四十七団体でした。時間超過団体は四組でした。反対に国際部・濱田鉄心先生の演武時間は三分五十五秒に凝縮されていました。磨き抜かれた演技内容は心に残るものでした。他演武者の終了を待つ態度も威風堂々です。

会合での挨拶でも長々と話される方と短い中に心に残るお話と色々なスピーチがあります。武道家はどこを目指しますか。

世間一般に自分の意のままにならないのが世の中にかくさんあることは、皆さんが承知していることです。相手の行いを善意にみるだけで、物の見方、感じ方が変わります。そういう気持ちになると人間の幅も広がります。お互いに親切心をもって見るときは目・口元・顔の表情に好意が見て取れます。言葉だけでは伝えられないものが伝わってきます。武道家としての立ち振る舞いに厚みが増してきます。

桑原兵充先生のお話に「和魂」の心がよく出てきます。今このことに集中し、一瞬を輝かす。天より与えられた使命を自ら学び深め、腹を決めて覚悟を決める。そしてことに当たる。一瞬に生きるという一念が大切だということを教えておいでます。今回の最後に演武されま